「傾き」のある疑問文
―会話データからの考察―

池田　佳子
名古屋大学国際言語文化研究科
ikedakeiko@nagoya-u.jp

１．はじめに

本研究は日本語疑問文の一考察である。中でも、「明日は雨ですか？」などの真偽疑問文(Yes/No Interrogatives, YNI)を扱う。特に、質問者（話者）の主観・判断の見込みが含意される疑問文（以下、安達 1992; 1999 を踏襲し「傾き(bias)のある疑問文」と呼ぶ）が考察の対象である。

１．１．　疑問文の成立条件・安達(1999:12)

1. 話し手には命題内容の真偽判断あるいはその命題を構成する情報の一部が欠けている。
（不確定条件）
2. 話し手はそれを聞き手に問いかけることによって充足することを意図する。
（問いかけ条件）
上記の成立条件をみても、疑問文は、疑問詞や疑問を表す終助詞が必ずしも必要不可欠な要素ではないことがわかる。

１．２．　本研究の趣旨

傾きのある疑問文、特に否定疑問文の形式とモダリティ的な意味に関しては、機能論的観点から議論がなされてきた（例：安達 1999;井上＆黄 1996）。本研究では、その疑問文の持つ「傾き」を、実際の会話に見られる質問発話に見つけていく。なぜ実際の会話発話を見る必要があるのだろうか。会話分析の視点を取り入れ、本稿では以下のように論じる。「質問」と「回答」は隣接対をなし、「質問」は「回答」されることを前提に行われる。質問に見合う回答がなければ、質問行為が成功したと言うことはできないだろう。同様に、質問に含意される「傾き」も、受け手にその「傾き」の存在が認識されて初めて意義をなす。会話のやりとりの中で「傾き」は共同構築され、会話を通してその「傾き」への対応がなされていくのである。上記であげたような「でしょう？」「よね」など、答えの嗜好性を示唆する言語使用がなされている場合、その「傾き」は明示的である。しかし、必ずしもこれらの標示がなくとも聞き手に「傾き」がある、すなわち[Yes]または[No]の回答（[Yes]=同意 [No]=不同意を意味する）のいずれかが嗜好されている質問は日常会話の中で多く観察できる。本稿では予備的調査段階の考察としてまず実際の会話にどのように「傾き」が観察できるかを詳しくみていくことにする。発表では本研究の今後の展開についても言及する。

２．会話に現れる真偽疑問文（Yes/No Interrogatives）と「傾き」

国外の会話分析研究では、YNI に関する先行研究は少なくない。ここでは Sacks (1973/1987)と Houtkoop-Steenstra & Antaki (1997)を例として説明していく。

２．１． Sacks (1973/1987)

最初に会話に出現する YNI について分析を投じた論文である。YNI への回答は、主に[Yes]回答が好まれる、というそもそもの傾向があることを指摘している。例えば以下のような例である。

例１:Sacks (1987:60)
A: that's where you live? Florida? (そこで住んでいるのですか？フロリダで？)
B: that's where I was born.（そこは私が生まれたところです。）

Sacks は、なぜ B が[No]と返答せずわざわざ「フロリダは生まれた場所だ」と述べなければならないのかに着目した。No, it's not.（いいえ）といった直接的な否定回答([No]回答)を回避するために、話し手は様々な言語行動を取る傾向にあるからである。この**[Yes]回答の嗜好性(preference for agreement)**は、回答者だけではなく、質問者にも影響がある。聞き手が、質問形態を自己修正してでも[Yes]肯定回答を誘出させる努力をすることがある。例2がその例である。

例 2: Sacks (1987:64)
A: Those are-are those that same- No that's not the pattern I gave you.
B: No I've broken from the pattern.

A は当初 are those that same pattern? (同じ模様？) と設問をし始めている。その後 that's not the pattern I gave you (私があげた模様じゃない) と言い換え、発話を終了している。それに対し、B は No と回答した。この会話の場合、同意回答が No(日本語:「そうです」)。ここでも Sacks の[Yes]回答への嗜好性は証明されている。

２．２. Houtkoop-Steenstra & Antaki(1998)

彼らの研究では、Sacks が述べたような会話が構築する「嗜好性(preference)」が心理学的調査インタビューの談話資料の分析に応用されている。従来、調査インタビューでは、被験者の公平な回答を得るために「他の人と比べて、あなたは成功していると思いますか？とてもそう思いますか、普通だと思いますか、それとも他の人と比べて成功していない方だと感じますか？」というように、全ての選択肢を一度に提示する（つまり聞き手に質問者の嗜好を感じ取らせない）ことが望ましい。しかし、現実には被験者の質問の理解度によって調査者の質問の仕方が変わってくる。例えば、以下の例を参照されたい。例 3 では、「あなたの仕事は、人の役に立つと思いますか」という質問がなされる。それを受け、（知能障害がある）被験者 R の反応が鈍く、設問の望む回答が一向に出てこない。その結果L7 以下の会話が展開する。

例 3 MT/KK/CL (Houtkoop-Steestra & Antaki 1998:294)

1→ I: .hh do you ↑think what you ↓do during the
2 ↓ day ↑Clare (0.2) helps other ↓ people
クレア、自分の仕事は日ごろ人の助けになっていると思う？
3 R: ˚mm˚
ふん
4 I: d'you think it ↑helps them a ↑lot (0.8)
5 Some (0.2) or a li- (0.2) >or not at ↓all<
すごく助けになると思う、まあ普通に、それとも、少し-全然?
6 (2.0)
7→ *d'you think you ↑help other ↓people?*
あなたは人を助けていると思う?

8　R: yeah
　うん
9　I: ˚right o:kay˚
　そう、分かった。

「あなたは人を助けていますか」という設問に言い換えられたとたん、回答者の反応は早く、同意しているのが見てとれる。

３．本研究の考察

本稿は多種の場面設定下における日本語の YNI の質問発話を取り上げ、まず YNI が傾きを持つ疑問文として会話参与者に扱われることがあるか、そしてその扱いがどのように実際に展開していくのかを描写することを目的とする。以下、本稿で現時点で分析を行った3種類の談話資料（I　旅行会社社員と訪問客の会話　II　TV インタビュー番組「徹子の部屋」における会話　III　OPI 形式で執り行われた一般インタビューの会話）の会話例を見ていく。なお、現段階の考察では複数会話における複雑な発話権利取得の交渉や、参与枠組みの変化などの要因が質問者と回答者の行動に影響があることを避けるため、あえて二者対面の会話場面に絞った。スペースの関係上、数例のみを以下に記載し、説明を発表で加える。

旅行会社

例 4 TA:旅行会社の職員(Travel Agency) CL:相談客(Client)(=は言葉がすぐに続いて発話されている所)

CL がカナダに旅行を希望しており、食べ物について相談している。CL は魚介類がだめだということを TA に述べた直後の会話。

1　CL:　もうあとあれですかもう一週間とかなっちゃうと食べ物(・)とかああいう
2　　ファーストフードとかって:
3　TA:　そうですね.
4→　CL:　カナダなんかでも結構,　あるんですか.
5　TA:　うんありますね=ファーストフード,はい.

徹子の部屋

例 5　N: 長嶋茂雄　K:小柳徹子　（～は声色が異なることを示す）

最近長嶋が始めた加圧方式のウェイト・リフティングについて黒柳徹子が聞いている場面。

1　K: あのはっきり言うと、あの血圧測るときの(・)あのウーンっていうようなものをあの
2→　˚こういうとこに˚(・)あ[んなに強くは]=
3→　N:　[そうです.　] /((Kに向かってうなずく))
4→　K: =ない.
5→　N: そうです。((K から目をそらせ、Nの正面を見る))
6　K: あんなようなものを=((血圧計を腕につけるジェスチャーをする))
7　N:　=いえいえ((Kから目をそらせた状態で)).
8　血圧よりもっと強いです. /((手を横に二度振る))
9　(0.5)
10→　K: ～もっときつい？～/((組んでいた両手を左右に広げる))
11→　N: はい もっときついです.
12　K: ～ええ:::～((両手を広げたままで驚いたという仕草))

OPI 形式のインタビューデータ

例 7 1: インタビュー者（女性・大学教員） 2: 回答者（女性・大学生）

（:は母音をのばした形で発話されたことを示す。[は発話の重なり）

1	1	ああ::そうですか．
2	2	はい．う::ん　で，それでお金を貯めて，お金を貯めたら何を．
3	2	旅行[を=
4	1	[あ=
5	2	=したいなと
6	1→	このお休み中にですか。
7	2→	いえ(・)あのそう，春が(・)春休みとかにです．ええ．
8	1	うーん。
9	2	来年の夏にでも，
10	1	ああ: ああ：：
11	2	はい．

4. おわりに

今後の研究の方向として、ある程度の談話資料を用いてこの予備段階の考察で得た「傾き」を含む疑問文がどれぐらい日常会話全体を占めるのか明かにしていくことがまず行う予定である。次に、本稿でも少し触れている「傾き」が示唆する嗜好性がどのようにお互いのやりとりの中で解消されていくのか、連鎖の形態にさらに着目して傾向を探りたい。日本語教育や習得研究への応用を見据えた今後の考察としては、この日本語の疑問文が会話の構成や言語使用によって含意する「傾き」に対する意識（sensitivity）および対応能力を学習者の「対話能力(interactional competence)」の一部としてとらえ、どの習得段階でその意識と能力が発達するのか、また段階別にどのような言語行動でもって対処するのかを今後研究する必要があるだろう。最後に、本研究の考察は、実際の会話の展開から発話を切り離さず、密接に照合した形での分析方法により可能になったものである。このアプローチが、言語学的な疑問文の考察に加え、その機能と特徴の新たな多様性を見い出す上で参考になることを指摘したい。

5. 参考文献

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

井上優＆黄麗華(1996) 「日本語と中国語の真偽疑問文」『国語学』184：93-106

Houtkoop-Steenstra, Hanneke, and Charles Antaki, (1998).Creating Happy People by Asking Yes-No Questions, *Research On Language and Social Interaction* 30, 4, 285-315.

Sacks, H. (1987[1973]) On the preferences for agreement and contiguity in sequences in conversation. In: Button, G., J.R.E. Lee, eds., *Talk and social organisation*. Clevedon: Multilingual Matters: 54-69.